

# 伝文

日本口承文芸学会会報  
〈伝文〉第11号 1992年9月

発行 日本口承文芸学会  
〒112 東京都文京区白山5-28-20  
東洋大学・東洋学研究所 気付  
電話03-3945-7483

## 語りへの模索

松谷 みよ子

福島民話の会の佐藤久子さんが、新しい話者のテープを送ってくださった。この会から遠藤登志子さんという稀有の語り手が生まれたことは記憶に新しい。今まで語ることを忘れていた五十代六十代の話者が、仲間たちの問いかけにこたえているうちに、それが呼び水となって、いきいきと伝承の語り、遠藤さんの言葉でいえば脳の裏側にはりつついていた語り引き出されてくるのである。

今回の野辺喜江子さんは、伝承の語りと共に世間話を語りますと、身近な出来事もまた伝承の語りと同じリズムで語られる、それが興深かった。私どもが聴耳をもち、問いかけるならば、まだまだ埋もれている話者と出会うことができるのではないだろうか。

と同時に、新しい話者への道を歩み出していく人びとのことも忘れてはなるまい。語ることこそが口承文芸の本来の道であることに、多くの人びとは気づきはじめているのではなかろうか。そして、どのような語りこそが望ましいのか、模索が

はじまっている。語りのための民話集をつくってという要望もあり、多くの資料集からどう自分の語りに移すか、方法を求める声もある。そうなる、この道は一つの修行の場ともなりそう、このあたりは私どもが理論化なり実践化なりしなくてはならないところへきているのではないかと、思うのだけれども――。

さて我が身を顧みると、きちんとした語りは一つもできなくて、娘二人の幼い日に語ったのは、〈うり子姫とあまんじゃく〉である。男の子の孫ができて、〈桃太郎〉が加わった。岡山のくっちゃあ寝の桃太郎で、一つはどうなん半分やる、という、孫は「けちんぼだね」ときつという。近頃はイヌ、サル、キジだけでなく、ウサギも連れていってくれという。長い耳でばったばたと鬼をやっつけるのだそう。キビダングは三つしかないし、ウサギを連れていっていいものか、ほとんど困っている。これも模索の一つかとおかしい。

(東京都 練馬区)

## 1991年度第2回研究例会

1991年度第2回(通算22回)の研究例会は、92年3月14日午後、中央大学駿河台記念館で開催され、酒井正子、井口淳子の二氏による研究報告がなされた。討論の司会は藤井貞和氏が担当された。

酒井正子氏の発表「徳之島の葬歌の承譜 ― 奄美の民俗音楽文化から」では、徳之島の弔事専用の歌についての報告がなされた。

徳之島では、三味線のにせる「あそび歌」のなかに入り混じったものでなく、直接弔事にかかわ

って歌う専用の曲目に見られる。それは、「死者儀礼にかかわるもの」と「個人的な哀惜の歌」との二つに大きく分けられる。前者には、不定形の泣きクヤ、泣きクエと、定型の供養歌や泣き歌がある。以前には僧侶を呼ばず、これによって葬儀が進行した。後者には、わかれ遊びや歌掛けと歌詞が相互に流用する場合があります、死別と恋愛に共通する表現のあることが分かる。シマウタが弔いの歌から起こったという説は、一つの流れとしては認められるが、すべてではないという。

井口淳子氏の発表「物語の形成過程としてのパフォーマンス — 中国農村の語り物音楽より」では、1990年夏に中国河北省の農村で聞いた語り物「青雲剣」を材料にして、書かれたテキストと語られるものとのちがいが取り上げられた。

語り物には、文字テキストの使用不使用にかかわらず、語りのもととなる物語がある。と同時に、その語り手が挿入するエピソードがあり、こ

れは地方の「土語」で話され、独立した「笑話」となっている場合が多い。既存のテキストは「死詞」と呼ばれるが、それだけでは長大な語り物は成立せず、語り手の芸人が創作する部分で「滴水（流れる水）」と呼ばれるものが必要になる。これには韻文の決まり文句と散文の即興的な話しことばとがあり、パフォーマンスの場にあわせて、臨機応変に用いられるという。

## 1992年度日本口承文芸学会大会報告

1992（平成4）年度の第16回大会は、6月6日（土）～7日（日）の2日間にわたり、東京都文京区の東洋大学白山校舎を会場として開催された。参加者は約100名。

初日の午後は、「絵解きの比較研究」と題するシンポジウムが、小西正捷氏「インドの絵語り語り絵」、坂田貞二氏「北インドのヒンドゥー教徒によるクリシュナ神話・伝説の絵解き」、林雅彦氏「日本の絵解き・遡源の試み」の諸報告と、野村純一氏の司会によって、豊富な現物の展示と視覚的資料を使って行われた。

これにつづく会員総会では、1991年度の事業・会計・機関誌15号などの報告事項が承認され、つづいて1992年度の事業計画・予算案・機関誌16号の計画などが審議され、承認された。

学会名の英訳変更については、別項の伊藤清司氏の報告にあるように、結論が出せず、次年度の総会に持ち越しとなった。また1993（平成5）年度の大会は、東京都立大学の八王子市にできた新校舎での開催が決定された。総会の終了後、会場近くの「かに谷白山店」で懇親会が開かれた。

二日目は午前と午後に分かれて研究発表が行われたが、その発表者と題目は次の通り。

城野裕子氏 「犬鞆入」と「馬娘婚姻譚」の特殊性

川添裕希氏 誇張譚の発生

阿部敏夫氏 口承文芸から見たアイヌ・和人の文化接触に関する考察 — 動植物口承文芸を事例として

奥田統己氏 静岡地方のユーカラの伝承の地域性について

石井正己氏 『遠野物語』の文献学的研究

川森博司氏 異類婚姻と異常誕生の形態論 — 日韓比較の視点から

冨尾武弘氏 パラヒヤンガン物語とディエン高地の寺院遺跡

白石昭臣氏 稲と鉄の伝承

また二日目の午後の冒頭には、伊藤清司氏によって、「口承文芸と祭儀」と題する公開講演会が行われた。

### 学会名の英訳変更に関する経過報告

伊藤 清司

先年、学会名の英訳変更に関する問題提起がありましたのをうけて、小委員会が組織され（委員は荒木博之、飯豊道男、伊藤、大林太良、小沢俊夫、三原幸久、世話人大林）、アンケートによって各委員の意見を求めましたが、必ずしもその一致をみることができませんでした。

その後、都合により世話役を伊藤が引継ぎ、また会員からの積極的な提案もありましたので（伝え9号、10号参照）、次頁の表に記したとおり、それらを整理したうえ、本年2月に再度各委員の意

見（複数回答を含む）を徴しましたところ、C'案とG案にやや賛意が集まりましたものの、依然意見が割れ、一本化を見るに至りませんでした。

そこで本年3月の運営理事会に報告し、その処理について諮りましたところ、問題提起があつて以来かなりの期間が経過していることでもあり、このまま徒らに推移するのは怠慢の誇りもあろうから、進んで一本化に努力すべきであろうとの見解に立ち、6月6日、大会当日の理事会に報告をし、討議を経て了承を得ましたうえ、大会の総会でこれまでの経緯を報告し、C'案を理事会の第1案として提案して会員各位の賛否をたざしました。

しかし、総会席上、C'案に決することに疑義や反論がありましたので、万一総会で賛同を得られ

【学会名の英訳についての小委員会案】

- A (The) Society for Folk Literature Research of Japan
- B (The) Society for Oral Literature Research of Japan
- C (The) Japanese Society for the Study of Oral Literature
- C' (The) Japan Society for the Study of Oral Literature
- D (The) Society for Oral Literature of Japan
- E (The) Society for Oral Folklore Research of Japan
- F (The) Society for Folk Narrative Research of Japan (現行の英訳名)
- G (The) Japan Society for Oral Literature Studies
- H (The) Oral Literature Association of Japan
- H' Japan Oral Literature Association (JOLA)

ない場合についてあらかじめ得ておりました理事会の考えに従って、決定を明年6月に催される次期大会総会に持ち越すことにいたし、総会の了承をとりつけました。

因みに、以上のような経過をたどって未だ一本化を見るに至らない事由は必ずしも単純ではありませんが、主な問題は、欧米諸国の類似の学会とわれわれの日本口承文芸学会のそれぞれの研究対象がまったく一致しているとは、必ずしもいえない点にあるかと思われます。そのほか、for the study(studies)や research は学会であるゆえ不可欠という意見と、逆に不必要とする意見、society と association の意味内容についての見解、narrative の意味内容、冠詞の要不要、Japan か Japanese かななどにも及び、提案や批判は多岐に亘っております。さらに、会員各位の率直なご意見を承りたいと存じます。(東京都目黒区)

6月の総会で反対の意見を出された水野氏にご意見をまとめてくださるようお願いしたところ、2ページ近い長文をいただきました。そのままの掲載は不可能ですので、結論的な部分を要約して紹介します。(文責・飯倉)

私の意見と提案(要約)

水野 知昭

小委員会案のいくつかにある of Japan は文法的な誤り。また、C' 案で学会(研究を共通の目的とする会)を意味する Society と for the Study of が並ぶのは意味の重複である。学会名に Study (Studies) を使うのはまぎらわしいので避けたい。したがって理事会案には異議がある。

口承文芸の訳語に Oral Literature をあてるのも問題が多い。アメリカを中心として近年とみに盛んな Oral Literature Research なる学問は記号学的な、または統計学的な文学表現論で、しかも基本的には詩学の一部門である。Oral Literature および Oral Traditional Literature の英語から、民話、昔話、神話の分析や比較研究、およびその民俗学的な考察を連想することはきわめて困難である。

そこで私は、二つの案を提示したい。

[A案] The Japanese Society of Oral Tradition and Narratives (略称 JOTN) : Oral Tradition (単数)で「口頭で伝承される文化的事象」を表わし、Narratives (複数)で「研究対象となる数々の伝承」(広義での「文芸」)を表現したつもり。この場合、学会誌の方は Studies in Oral Tradition and Narratives となろう。

[B案] The Japanese Society for Oral-Traditional Arts and Literature (略称 JOTAL) : 「口承文芸」を「声によって表現され享受されてきた文芸的なもの」と、その一部が文字化されて発展をとげる「ことばのアルス(芸)」と捉えて、口承のみならず書承の文芸についても問題にすべきだという、川田順造氏の着想をふまえたもの。

英語の Verbal Art は prose narratives (myth, folktales, legend) のほかに謎々や格言なども含まれるが、一般になじみが薄いので、Oral-Traditional Arts and Literature とすれば、「ことばのアルス」をほぼ過不足なしに表現できる。

Arts は Liberal Arts の Arts であって、一般の芸術と区別するため複数形でなければならないが、語りの文芸だけでなく、歌謡、詩歌、舞踏なども含まれる。

この場合、学会誌の方は Journal of Oral-Traditional Arts and Literature となろうか。

私個人としては、このB案を推薦したい。

(福島県郡山市)

《こえ》 八人芸 — 声と音の競演 —  
石井 正己

この夏、秋田県仙北郡田沢湖町の 津島留吉氏 (1908年生)から、八人芸について聞くことができた。その名のとおり、本来は幕の陰で、大太鼓・小太鼓・鼓・横笛・三味線・摺鉦・鈴・歌という八人分の芸を一人で演じるものである。津島氏は嗜眼者であるが、芸が好きで、座頭の西宮徳治 (1879~1936)から習った。声と音の競演と呼ぶにふさわしいこの芸について、そのおおよそを記しておきたいと思う。

演目は「せんざえもん婿取りの場」。せんざえもんは娘のおこまと奉公人のやきちと三人暮らしである。せんざえもんは芸が好きで、娘の婿に芸の優れた者を迎えたいと思う。婿になりたいと希望した者は、大太鼓のかきねのばらえもん、小太鼓のせきぶんとはねた、鼓のなべのふたとってきち、横笛のささやぶのがさきち、摺鉦のはたなかまめぞう、鈴のやまさかころんだのすけ、三味線のきのしたくりお、歌のはなしたながべいの八人であった。それぞれに芸をさせてみた後、村の人に見せたいということになり、踊りのおこまを含めた一行は家を出てゆく。その間、やきちには、

— 受贈書リスト —

日本民俗学 188号 日本民俗学会 91.11  
 沖縄国際大学文学部紀要 国文学篇 32号 91.12  
 日本民話の会通信 99~101号 92.1~5  
 民話の手帖 50号 日本民話の会 92.3  
 同志社国文学 36号 同志社大学国文学会 92.3  
 甲南国文 39号 甲南女子大学国文学会 92.3  
 日本語訳中国昔話解題目録 中国民話の会 92.1  
 奇怪動物百科 J・7ネット 高橋宜勝訳 博品社 92.6  
 文化財保護の足跡 北海道文化財保護協会 92.3  
 北海道の「口承文芸」和人文献目録 ヲホホ語誌 92.5  
 宮崎県史 資料編 民俗1・2 宮崎県 92.3  
 イタリアの昔話 剣持弘子編訳 三弥井書店 92.7

☆今号もワープロとコピーで作りました。次号は93年2月刊。 [編集担当：飯倉・常光・徳田]

日本口承文芸学会への入会希望者は入会申込書をご請求ください。 入会金1,000円、年会費4,000円。  
 入会申込書請求・送金先：〒112 東京都文京区白山 5-28-20 東洋大学・東洋学研究所 気付  
 日本口承文芸学会事務局 (TEL.03-3945-7483) 振替：東京 8 - 44834  
 The Society for Folk-Narrative Research of Japan, c/o The Institute for Asian Studies, Toyo University, 5-28-20 Hakusan, Bunkyo-ku, Tokyo, 〒112, Japan.

口承文芸に関心のある方を広くご紹介ください

酒樽の酒を釜に移させ、火を焚いて燗をさせる。そのうち、雨が降り、雷が鳴ったので、やきちに洗濯物を入れさせる。天気が回復し、出かけた一行が帰ってくる。そして、おこまが婿に選んだのは、三味線のきのしたくりおであった。きのしたくりおは得意な曲を弾いてみせる。お祝いの酒盛りが始まり、きのしたくりおの三味線とおこまの踊りの掛け合いが行われる。せんざえもんはお礼を述べる。

津島氏は三味線が得意なので、きのしたくりおが婿になっているが、演者が最も得意とする芸をもつ者をおこまの婿にする。また、この中で演じる曲は、その場によって、「うかれ節」でも「生保内節」でも何でもよい。このように芸の大枠は決まっているが、演者や場によって、自在に演じられてきたことが知られる。しかも、八人芸を習得した人にだけ教える曲があった。それは、せんざえもん (實在) の弾いた「せんざにがた」である。この三味線の手は津軽三味線の流れを汲んでいる。津軽三味線の源流は座頭にあるので、津軽と秋田の座頭に交渉があったことが知られる。津島氏は現在、こうした芸や伝承を二人の弟子に教えつつある。江戸初期以来の伝統をもつ八人芸が二十一世紀に向かって受け継がれることを、願ってやまない。 (東京都 東久留米市)

民具マンスリー 24巻10号~25巻2号 神奈川大学  
 日本常民文化研究所 (同研究所要覧 1992も)  
 日本学術会議月報 32巻12号~33巻6号  
 国立歴史民俗博物館研究報告 35~37集、39~40集  
 (館蔵資料概要、映像・音響資料概要も)  
 口承文芸資料集 7号 響文社 92.3  
 国文学研究資料館報37~38号/講演集13号/国際  
 日本文学研究集會會議録15回/共同研究報告書

訃報 内田り子氏 (東京都) 1992年5月1日  
 ご逝去。謹んで、ご冥福をお祈り致します。